

# 『源氏物語』 夕顔卷の再検討

——「ひとりごつ」の意味に注目して——

吉海 直人

〔要旨〕

夕顔をめぐる謎は、どうやら随身の勘違いから始まったようである。源氏の発した「をちかた人にもの申す」という問いは、隨身ではなく夕顔側（遠方人）に向かって発せられたものだったが、源氏が顔を出してさしのぞいていたこと、そして古歌の一節が朗詠されたことで、つい隨身は自分に質問されたと思ひ込んで、「夕顔です」と答えてしまったのだ。そのため物語展開が変更されたことで、読者の誤読が生じてしまったのである。

本稿では「ひとりごつ」に注目してみた。この「ひとりごつ」は、決してつぶやきめいた「独り言」ではなく、歌の一節が朗詠されたものであるから、その声は一部始終を覗いていた夕顔側にも届いていたはずである。だからこそ夕顔側もそれに応じて、「心あてに」歌を返したのである。このように解釈すれば、決して夕顔側（女側）から歌を読みかけたわけではなかったこ

とになる。

看過されていた「ひとりごつ」に注目することで、従来の誤読の様相がはっきりと見えてくる。要するに夕顔卷の謎は、随身の勘違いから発生したものであり、それを読者が誤読したことが最大の原因だったのである。

## 一、夕顔卷の再確認

夕顔物語は、五条大路における光源氏と随身のやりとりから展開しており、その場面は非常に重要であると思われる。ところが従来はこの部分の解釈をいささか疎かにしていたために、続く夕顔の宿から贈られてきた「心あてに」歌の解釈に謎が生じてしまい、それをめぐって長く論争が続いてきた。その謎を

解消するために、かつてこの場面を〈垣間見〉という手法で分析してみたことがある。<sup>(1)</sup>。その際、聴覚の重要性を強調しておいた。もちろん決して視覚を軽視したわけではない。

そもそも冒頭附近は、

簾などいとう涼しげなるに、をかしき額<sup>すきめ</sup>つきの透影<sup>すいかげ</sup>あ

また見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、

あながちに丈高<sup>たけ</sup>き心地ぞする。

(新編全集135頁)

とあって、夕顔の宿側の複数の女房達が、牛車の中にいる源氏の方を覗いていたことから始まっている。従来、垣間見は一方通行であり、のぞく側はのぞいていることを相手に悟られないという暗黙の了解があった。ところが垣間見の実体は、必ずしも一方通行ではなかった。ここも源氏は、自分がのぞかれていることを「透影」によって察知している。だからといってその時点で垣間見は終了せず、むしろ源氏はのぞかれていることを承知の上で、という以上に相手方に興味を抱いて、

御車もいたくやつしたまへり。前駆<sup>さき</sup>も追はせたまはず、誰

とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへ

れば、門<sup>かど</sup>は藪<sup>しとみ</sup>のやうなる押し上げたる、見入れのほどなく

ものはかなき住まひを、

(136頁)

云々と、こちらからわざと「さしのぞ」いているのである。

この場面が、奇妙な〈相互垣間見〉によって構成されていることには留意すべきであろう。ただし源氏が「さしのぞ」いても、相手側がよく見えることはあるまい。どうやらこの「さしのぞく」とは、単に「のぞく」のではなく「顔を出して見る」ことなのである。源氏は安心してという以上にわざと「さしのぞく」<sup>(2)</sup>ことで、相手方に自分の顔をはっきり見せようとしているのである(パフォーマンス)。もし源氏のこの行為がなければ、「心あてに」の歌も詠まれなかったかもしれない。その証拠に夕顔の宿側は、それを「いとしく思ひあてられたまへる御側目」(141頁)と見ていた。ここで「さしのぞく」という語に注目することで、ようやく「のぞく」とは異なる新しい視点が浮上してきたわけである。

次に視覚から離れて聴覚について確認しておきたい。まず該当本文を引用しておこう。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛<sup>かづら</sup>の心地よげに這ひかかれ  
るに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「を  
ちかた人にも申す」と独りごちたまふを、御隨身ついゐ  
て、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名

は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしきうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、「口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

(同頁)

牛車から夕顔の宿を観察していた源氏は、そこに名も知らぬ白い花が咲いているのを発見する。その途端、源氏は「うちわたす遠方人にも申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」(『古今集』一〇〇七番)という旋頭歌の一節、「をちかた人にも申す」を口にした。これはいわゆる引歌表現であり、引用されていない「そこに白く咲けるは何の花ぞも」に真意が込められている。要するに源氏は白い花の名前を知りたかったのである。

では源氏は、一体誰にそれを尋ねているのだろうか。これが従来看過されてきた、あるいは勘違いされてきたことの一つである。というのも、それが「独りごちたまふ」つまり「独り言」とされているからである。「独り言」である以上、相手の詮索は不要となってしまう。その源氏のささやかな「独り言」に控

えていた隨身が即座に反応し、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる」と答えている。そこで源氏はそれを「げに」と受け、続いて「一房折りてまゐれ」と命じている。こうなると文脈上、源氏は隨身に質問したということで済まされてしまう。『古今集』からの引歌であることを承知の上で答えている点、さすが源氏の隨身だけのことはあるという評価も与えられている<sup>③</sup>。

こういった物語の流れをすんなり納得してしまったために、読者は以後の読みを大きく誤ったのではないだろうか。これを打破するヒントは、まさしく「ひとりごつ」の解釈にあった。しかしこの語は新編全集の注にも取り上げられておらず、「独り言をおっしゃると」とそのまま現代語訳されている。おそらく、そこに問題のあることにさえ気付いていないのである。そのことは古語辞典で「ひとりごつ」を引いてみれば一層明らかである。「独り言をいう」以外の意味はほとんど記されていないからである。岩波の『古語辞典』ですら「相手なしに一人てつぶやく」となっている。頼みの小学館の『古語大辞典』『日本国語大辞典』も同様であった。そのため私自身、常識の落とし穴にはまってしまっていた。

唯一、角川『古語大辞典』だけは、源氏物語夕顔巻と須磨巻の例を出して、

独り言を言う。聞き手がいないとき、また聞かせるつもり

がなくて、詩歌を誦し、口に出して歌を詠むことにいう。

と説明されている。二番目の意味ではあるが、ここによりやく「詩歌を誦し、口に出して歌を詠む」という意味が登場したわけである。ついでに「聞き手がいないとき、また聞かせるつもりがなくて」についても詳しく検証したい。

## 二、「ひとりごと」の用例

ここで参考までに『古典対照語い表』（笠間書院）を調べてみたところ、「ひとりごと」は『蜻蛉日記』二例、『枕草子』二例、『源氏物語』四六例、『紫式部日記』二例、『更級日記』二例となっていた<sup>4</sup>。奈良時代の作品には見当たらないようなので、平安時代語としておきたい。その他、『土佐日記』一例、『うつほ物語』五例、『平中物語』一例、『大和物語』三例、『落窪物語』二例、『和泉式部日記』一例を加えておきたい。

そのうちの『土佐日記』一月九日条には、

船にも思ふことあれど、かひなし。かかれど、この歌をひとりごとにして、やみぬ。

思ひやる心は海をわたれどもふみしなければ知らずや

あるらむ  
(新編全集25頁)

と出ていた。「この歌を」とあるので、ここで和歌を朗詠したことは間違いないまい。最初の用例からしてこれである。新編全集の頭注一八には、「独詠。贈答歌が成立する心の一体感は以後途絶する。」という興味深いコメントが施されていた。こは一般的な独り言ではなく、また単に歌を朗詠するのでもなく、「ひとりごとにして」とあるように共感は得られなかったかもしれないが、独詠（相手の答歌を求めない）したことに意味がありそうだ。

続いて『平中物語』二十二段には、興味深い用例が見つかった。

はては、ものいひふれむ人もなかりければ、よろづの言葉をひとりごちけれど、さらに答へする人もなかりければ、いひわびてぞ、いでて来にける。  
(新編全集490頁)

これも一般的な独り言ではなく、「答へする人」を期待しての発言であろう。ただし相手が聞いてくれない・答えてくれない

いことで会話が成立せず、やむなく一方的にしゃべり続けている例である。新編全集には「独演」と訳してあったが、非常に面白い用例であろう。次に『うつほ物語』全五例は、俊蔭巻の三例すべてが和歌の朗詠であった<sup>⑤</sup>。まず、

わび人は月日の数ぞ知られる明け暮れひとり空をながめて

など、ひとりごちてながめける。  
(新編全集49頁)

は俊蔭女の独詠である。次に、

かかるところに住むらむ人を思ひやりて、独りごとに、

虫だにもあまた声せぬ浅茅生にひとり住むらむ人をこ

そ思へ

とて、深き草を分け入りたまひて、  
(新編全集52頁)

は若小君の独詠であった。三例目の、

たづが音にいとども落つる涙かな同じ河辺の人を見し

かは

あはれ」とひとりごちて、  
(新編全集63頁)

も若小君の独詠である。ただしここは和歌の後の「あはれ」とだけ口にしたのか、それとも和歌を含めての「ひとりごち」なのか、解釈の分かれるところである。ここでは和歌を含めて考

えておきたい。『落窪物語』には、次のような例がある。

あこき、御文を脂燭さして見れば、ただかくのみあり。

君ありと聞くに心をつくばねの見ねど恋しき嘆きをぞ

する

「をかしの御手や」とひとりごちゐたれど、かひなげなる御けしきなれば、おし巻きて御櫛の箱に入れて立ちぬ。

(新大系11頁)

少将からの手紙を見たあこきが、姫君の興味を引くように多少演技してしゃべっているところである。ここは「をかしの御手や」だけではなく、書かれている和歌も詠じられたのではないだろうか。いずれにしても聞こえよがしに「ひとりごち」ていることに間違いはあるまい。

次に『蜻蛉日記』の全二例の内の一例<sup>⑥</sup>が上巻天曆十年六月条に、

六月になりぬ。ついたちかけて長雨いたうす。見出だして、

ひとりごとに、

わが宿のなげきの下葉色ふかくうつろひにけりながめ  
ふるまに

などいふほどに、七月になりぬ。  
(新編全集104頁)

とあった。この場合も「独り言」をつぶやくという以上に、和歌を詠じていると解せそうである。本来ならば兼家に対して贈るべき歌であろう。あるいは紙に書き付ける手習歌（独詠）と近いものとも考えられられる。女流日記では『和泉式部日記』にも、「目をさまして、「風の前なる」などひとりごちて」（新編全集65頁）とある。「風の前なる」に関して新編全集の頭注一一には、「仏典からの引用」とコメントされている。もちろん仏典の一節を口ずさんだとしてもいいし、仏典を踏まえた和歌の一節を詠じたと解することもできよう。

同様の例は、『枕草子』二七四段に、「雪こそめでたけれ。『忘れめや』などひとりごちて、しのびたることはさらなり」（新編全集428頁）と見えている<sup>7</sup>。これも古歌（出典未詳）の一節を詠じている場面である。また『紫式部日記』には、

年くれてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな

とぞひとりごたれし。（新編全集185頁）  
とあった。これなど独詠とするのがふさわしいようである。なお『更級日記』には、

わがごとぞ水のうきねに明かしつつ上毛の霜をはらひ

わぶなる

とひとりごちたるを、かたはらに臥したまへる人聞きつけて、

まして思へ水の仮寝のほどだにぞ上毛の霜をはらひわびける（新編全集332頁）

と出ている。ここでは作者の独詠を聞いた同僚の女房が歌で応じたことで、結果的に贈答となっている例である。

以上のように、和歌の独詠を意味する「ひとりごつ」の用例は決して少ない数ではなかった。むしろ単なる独り言の方が用例的には少ないようである。それにもかかわらず従来の辞書は、安易に「独り言」として済ませてきた（問題にできなかった）。果たしてこれで本当に真意が伝わるのであろうか。

### 三、『源氏物語』の「ひとりごつ」（一）

さて「ひとりごつ」の先行研究としては、倉田実・上村希・田辺玲子三氏の論文があげられる<sup>8</sup>。ただし夕顔巻の用例は必ずしも重視されていなかったので、改めて検討してみた次第である。早速、源氏物語の「ひとりごつ」の用例数を『源氏物語

大成』の索引で調べてみたところ、

(新編全集 357頁)

ひとりごちあまる 1例(早蕨)

ひとりごちおはす 3例(賢木・幻・椎本)

ひとりごちある 1例(手習)

ひとりごつ 32例(夕顔2・末摘花・紅葉賀・賢木・須磨3・霽標2・蓬生・薄雲・少女2・玉鬘・初音・野分2・若菜上・若菜下2・横笛・夕霧・勾宮・早蕨・宿木2・東屋・蜻蛉2・手習2)

うちひとりごつ 2例(帚木・明石)

ひとりごと 6例(葵・霽標2・少女・夕霧・椎本)

という結果になった(総計四五例)。源氏物語以前の作品に比べると、異常な程に用例が多いことがわかる。巻別では、霽標巻四例・須磨巻三例・少女巻三例・手習巻三例がやや多いようであるが、特に用例が偏向しているというわけではない。

また人物別では源氏と薫に用例が集中しているが、主人公であるから当然と言えば当然であろう。なお横笛巻にある、

昔をしのぶ独りごとは、さても罪ゆるされはべりけり。

には「琴」が掛けられており、やや特殊な用法となっているので用例数から除外した。全体を見渡すと、やはり和歌を朗詠している例が圧倒的に多いことがわかる。それを便宜的に二分して、①「古歌」や「漢詩」の一節を詠じるものと、②自詠を吟じるものに分けてみたい<sup>⑨</sup>。もっとも須磨巻には、源氏の独詠が一箇所<sup>⑩</sup>に混在している。

入り方の月影すごく見ゆるに、「ただ是れ西に行くなり」と独りごちたまひて、

いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこと  
もはづかし

と独りごちたまひて、例のまどろまれぬ暁の空に千鳥いとあはれに鳴く。

友千鳥もろ声になくあかつきはひとり寝さめの床もた  
のもし

また起きたる人もなければ、かへすがへす独りごちて臥し  
たまへり。  
(新編全集 209頁)

これほど近接しているところに三例も集中している例は、他に霽標巻があげられるだけである(後述)。最初の用例は漢詩

『菅家後集』『代月答』の一節を朗詠したもので、二番目の用例は「いづかたの」歌を朗詠したものである。そして三番目は「友千鳥」歌を源氏が繰り返し朗詠したものである。なんと源氏は一人で三回も「ひとりごち」続けているわけである。それによって孤独を表出しているのかもしれないが、先にあげた『平中物語』と同じく、独演会風（饒舌）にも感じられる。あるいは呪術的な意味合いもあるのかもしれない。側にいた惟光達はこれをどのように受け止めたのであろうか。「起きたる人もなければ」とあるが、本当に眠っていたわけではあるまい。

# ① 古歌の一節の例として、少女巻には、

幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、「雲居の雁もわがごとや」と独りごちたまふけはひ若うらうたげなり。

（新編全集48頁）

と、夕霧との仲を引き離された雲居の雁が、有名な古歌（『奥入』所収）の一節を朗詠している例が見られる。しかもその直後に、

独り言を聞きたまひけるも恥づかしうて、あいなく御顔も引き入れたまへど、

（同頁）

とあり、夕霧に「独り言」ならぬ独詠を聞かれたと思った雲居

の雁は恥づかしがっている。これなど相手に聞かせるつもりのない独詠ということになるうか。ただし朗詠したことで、確実に夕霧の耳にも届いたのである。

逆に考えれば、相手に聞かせたい「ひとりごち」もあっていいことになる。例えば手習巻の、

前近き女郎花を折りて、「何にほふらん」と口ずさびて、  
独りごちて立てり。

（新編全集309頁）

は、浮舟に懸想する中将が、『拾遺集』一〇九八番歌の一節を独詠しているところである。「口ずさびて、独りごち」と記されているが、「口ずさぶ」も和歌を朗詠することであるから、ここは類似表現を重ねていることになる（「うそぶく」「口遊び」なども類義語）。これなど中将のパフォーマンスの一種であろうから、むしろ相手に聞かせたい（見せたい）・聞いてほしいはずである。浮舟に対する中将の働きかけは、

忍びやかに笛を吹き鳴らして、「鹿の鳴く音に」など独り  
ごつけはひ、まことに心地なくはあるまじ。

（手習巻317頁）

ともあり、こも浮舟側に自己アピールしているのであるから、決して相手に聞かれない「独り言」などではないはずである。むしろここは相手に聞こえよがしに（相手の気を引こうと）



『古今集』二二四番歌の一節を朗詠していると見たい。

#### 四、『源氏物語』の「ひとりごと」(Ⅱ)

一方、②自詠を吟じる例としては、夕顔巻のもう一例があげられる。

空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくながめたまひて、

見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつまじきかなと、独りごちたまへど、えさし答へも聞こえず。

(新編全集189頁)

源氏は亡くなった夕顔のことを思って歌を詠じた。その後に「えさし答へも聞こえず」とあるのは、それが単なる「独り言」ではなく、右近の返歌を期待しての発言だったからではないだろうか。そうなるとこの「ひとりごと」は独り言を言うのではなく、また独詠を意図しているのでもなく、返歌を期待して歌を吟詠するという意味にとれる。その場合、必ずしも小さな声でなくとも良きさうである。むしろ返歌を期待しているのであれば、相手にははっきり聞こえるように意識して詠じているはず

である。

この意味で用いられている例も意外に多い。初音巻では末摘花を訪問した源氏が、

ふるさとの春の梢をたづね来て世のつねならぬはなを見るかな

独りごちたまへど、聞き知りたまはざりけんかし。

(新編全集155頁)

と、紅梅と末摘花の鼻を掛けた歌を朗詠している。歌の後に「聞き知りたまはざりけんかし」(草子地?)とある点、逆にこの朗詠が末摘花にも聞こえていた、聞こえるように朗詠していたことがわかる(ただし真意は伝わらなかった)。これに対して東屋巻の例はやや特殊である。

かたみぞと見るにつけては朝露のところせきまでぬる袖かな

と、心にもあらず独りごちたまふを聞きて、いとどしほるばかり尼君の袖もなき濡らすを、

(新編全集96頁)

薫の独詠は、当然牛車に同乗している浮舟・尼君・侍従の三人に聞こえているはずだが、亡き大君のことは弁の尼にしか理解(共感)されないから、共感した弁の尼だけが反応して泣い

ているのである<sup>(10)</sup>。宿木巻には、

やどり木と思ひいでは木のもとの旅寝もいかにさび

しからましと独りごちたまふを聞きて、尼君、

荒れはつる朽木にもとをやどり木と思ひおきけるほどの悲

しさ  
(新編全集462頁)

とあって、薫の「ひとりごち」<sup>(11)</sup>に弁の尼が返歌したことで、

結果的には贈答形式になっている(前述の『更級日記』に類似)。

「ひとりごち」は決して返歌を期待しないものではなかったのだ。また椎本巻には、

色かはる浅茅を見ても墨染にやつる袖を思ひこそや

れ

と独り言のやうにのたまへば、

色かはる袖をばつゆのやどりにてわが身ぞさらにおき

どころなきはつるる糸は  
(新編全集199頁)

と出ている。「独り言のやうに」と臙化されているが、薫の独

詠に大君が返歌したことで、やはり結果的には贈答になっている。

一方、返歌が期待できない例として賢木巻では、

霧いたう降りて、ただならぬ朝ばらけに、うちながめて独

りごちおはす

行く方をながめもやらむこの秋は逢坂山を霧なへだて

そ  
(新編全集95頁)

と、源氏は伊勢へ下向した六条御息所を偲んで和歌を詠じてい

る。「うちながめて」とあるので、ここは返歌を期待している

わけではあるまい(読者には聞こえる)。また野分巻では、そっ

けなく帰った源氏に対して明石の君が、

おほかたに荻の葉すぐる風の音もうき身ひとつにしむ

心地して

と独りごちけり。

(新編全集277頁)

と独詠しているが、これも源氏の耳には届かなかったであろう

(しかし読者には聞こえる)。これなど呪術的な意味合いを含ん

でいるのかもしれない。

以上、長々と列記したが、これらの「ひとりごち」は相手に

聞こえたかどうかの差異はあるものの、和歌を詠じる意味と見

て問題なさそうである。いやそう取るべきであろう。

## 五、『源氏物語』の「ひとりごと」(III)

それに対して玉鬘巻の例は、

硯ひき寄せたまふて、手習に、

恋わたる身はそれなれど玉かつらいかなるすちを尋ね  
来つらむ

あはれ」とやがてひとりごちたまへば、(新編全集132頁)

とやや複雑になっている。歌の前に「手習に」とあるので、和歌は書かれたようである。それに続いて「あはれ」とやがてひとりごちたまへばとあるのだから、口にしたのは「あはれ」だけれども解釈できる。この場合は朗詠というより歎息の意味かもしれない。これなど前述した『うつほ物語』俊蔭巻の例と類似しているのではないだろうか。

これに近い例が落標巻に認められる。ここも須磨巻と同様に三例が集中しており、

うち返し見たまひつつ、「あはれ」と長やかにひとりごちたまふを、女君、後目に見おこせて、「浦よりをちに漕ぐ舟の」と、忍びやかにひとりごちながめたまふを、「まことは、かくまでとりなしたまふよ、こはただかばかりのあはれぞ

や。所のさまなどうち思ひやる時々、来し方のこと忘れが  
たきひとり言を、ようこそ聞きすぐいたまはね」

(新編全集296頁)

となっている。源氏が明石の君からの返歌を見て、「あはれ」と歎息を漏らすと、傍にいた紫の上が即座に反応して「浦よりをちに漕ぐ舟の」と伊勢の歌の一節を「忍びやかに」朗詠している。それを聞いた源氏はあくまで「忘れがたきひとり言」だと弁解している。最初の「長やかにひとりごち」を新編全集では「長大息」と訳しており、これも玉鬘の例と近似しているようである。ただしわざわざ「長やかに」とあるので、単なる歎息ではなく返歌を朗詠しているのかもしれない。

また宿木巻の、

今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と  
見る見る

はかな」とひとりごちて、

(新編全集391頁)

も、前述の「あはれ」に準じて考えると歌の独詠ではなく、薫は「はかな」とだけ歎息したとも考えられるが、やはり和歌も詠じたと取りたい。早蕨巻の、

「ものにもがなや」と、かへすがへすひとりごたれて、

しなてるやにほの湖に漕ぐ舟のまほならねどもあひ見  
しものを

とぞ言ひくたさまほしき。

(新編全集365頁)

では、『源氏釈』所引の古歌を薰が繰り返し朗詠している。こ  
こは「かへすがへす」がポイントである。これも前述の須磨巻  
の例と類似している。

有名な葵巻の、

雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてなが

めむ

行く方なしや」と独り言のやうなるを、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくら

すころ

とのたまふ御気色も浅からぬほどしく見ゆれば、

(新編全集55頁)

は、葵上の死後、女房の中将が源氏に向かって和歌を詠じたところ、源氏がそれに返歌をしており、贈答（共感）の形式になっている。これも「行く方なしや」という古歌の部分だけを朗詠したと見ることもできるが、返歌は贈歌の表現を踏まえているので、歌を含めて考えたい。「やうなる」とあるのは、源氏が

それを「ひとりごと」と判断したからであろうが、即座に返歌をしている点、中将の和歌が詠じられたからこそ、源氏は歌を返すことができたのではないだろうか。

末摘花巻の例はかなり複雑である。

紅のひとはな衣薄くともひたすらくたす名をしたてず

は

心苦しの世や」と、いという馴れて独りごつを、

(新編全集300頁)

大輔命婦は「心苦しの世や」とだけ「独り言」を言ったのか、それとも和歌を含めてなのか判別しにくい。ただしこれは源氏の歌に対する返歌として詠まれたものであるから、源氏に聞こえるように「いという馴れて」歌を詠じたと見たい。そうなる」と贈歌でも答歌でも、「ひとりごち」が可能ということになる。

## 六、「ひとりごつ」に注目した仮説

以上、長々と「ひとりごつ」の用例を分析してきた。その結果源氏物語には、いわゆる「独り言」では解釈できない用例が

少なからず存していることが明らかになった。「歎息」する例も多少認められるものの、その大半は古歌もしくは自詠を吟じることであり、音量的にも他者に聞こえている可能性が高い。

中には近くにいる人に聞こえよがしに独詠している例もあるし、当たり前のようにそれに歌が返されている例も少なくなかった。

こうなると「ひとりごつ」の用例の多くは、字面通りに「独り言」と訳すのは間違いいことになる。辞書の説明も改訂が必要であろう。肝心の夕顔巻の場合も、源氏は「をちかた人にも申す」と古歌を朗詠したと訳すべきではないだろうか。それは必ずしも小さな声ではなかった。だからこそ光源氏の発した問いかけは、随身の耳に届いただけでなく、もっと遠くの夕顔の宿まで届いた可能性も否定できないのである。

もともと源氏は「をちかた人」、つまり遠方の人（夕顔の宿）に向かって尋ねているはずである。牛車のそばにいる随身は、位置的にも「をちかた人」とは言えまい。要するに源氏は近くの随身に問いかけたのではなく、今自分をのぞいている夕顔の宿（いわば観客）に向かって、聞こえよがしに（聞こえる程の音量で）古歌の一節を詠じた（パフォーマンス）と解釈すべきではないだろうか（他に人は存在しない）。それにもかかわら

ず、そばにいた随身が答えてしまったものだから<sup>12</sup>、その後の展開が随身を主体として変更されてしまったわけである（源氏も「げに」と同調してしまっている）。

このことに関して中澤氏は、源氏が「さしのぞ」いていたことから、

少なくとも随身が源氏の表情を読みとることができる程度には、顔が見えていたはずである。源氏の顔が見えていなければ、随身は、源氏の「をちかた人にも申す」という独り言に応答することはなかったであろうし、源氏の視線の先に夕顔の花を認めていなければ、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる」と返答することはできなかったであろう。

と述べておられる<sup>13</sup>。ここで中澤氏は「ひとりごつ」をそのまま「独り言」と訳しておられるし、引歌の解釈などで本論とは解釈を異にしているものの、「さしのぞ」にいる源氏の顔を随身が見ていたとする点には賛意を表したい。随身は源氏が「さしのぞ」いたことで、自分に質問していると勘違いしたのであろう。「さしのぞく」には二重の効果があったのだ。あるいは随身は、源氏の腹心の部下である惟光不在を好機と見て、

自分の教養の高さを売り込もうとしたのかもしれない。この点が謎を解明する最大のポイントではないだろうか。

また中澤氏は、

結局、夕顔にしてみれば、「をちかた人にも申す」「白く咲けるは何の花ぞも」という問いかけに対する返歌という意識で歌を贈ったのであって、決して女の方から歌を詠みかけたという意識はなかったはずである。

とも述べておられる。同様のことは清水婦久子氏も、

源氏は、花のそばの「遠方人」に「そのそこに白く咲ける」と問うたのであり、こちら側にいる隨身が「かの白く咲ける」と答えたことは、本来の趣旨にあっていない。答えるべき人は「遠方人」で、できれば引歌に対しては歌で答えてほしかった。(62頁)

と論じておられる<sup>①</sup>。本来であれば源氏の問いかけには、夕顔の宿側が答えるはずだったのだ。そう解釈すれば、夕顔は決して女性側から先に歌を贈ったわけではなく、問われたことに對してただ返歌をしたことになる。これは夕顔を考える上でも、大きな変更点になるのではないだろうか。

## まとめ

本論では「心あてに」歌の謎を解明するために、源氏の動きを丹念に再検証してみた。特にこの場面が①相互垣間見になっていること、また②「さしのぞく」の意味が「顔を出して見せる」ことであることに加えて、③「ひとりごつ」が古歌を朗詠する意味であることを確認し、あらためて源氏の口にした「をちかた人にも申す」の真意を総合的に検討してみた。

その結果、隨身の誤解というか、さかしらという新解釈が浮上してきた。といっても、隨身は単に源氏の「ひとりごつ」に反応したのではなく、源氏が「さしのぞ」いて朗詠したものであるから誤解したのである。そのため読者も、本来答えるはずの存在が見えなくなってしまったのだ。しかしタイミングはずれてしまったものの、夕顔側からの「心あてに」歌は、まさしく源氏の「そこに白く咲けるは何の花ぞも」という問い（ひとりごち）に対する答えとして、「夕顔の花です」と返されたものと見るべきではないだろうか。それで始めて問いと答えが完結したことになるからである。

失念されているかもしれないが、源氏と隨身はずっと夕顔の

宿側からのぞかれ続けていた。当然、両者の一連の会話もずつと聞かれていたであろう。だからこそ夕顔の宿（演劇の観客）側は、花を手折りにきた随身に「どなたですか」とか「何か御用ですか」という質問なしに、「これに置きてまゐらせよ」（137頁）とスムーズに対応できたのではないだろうか。同様に歌を贈られた源氏の方も、待っていたかのように受け取っているのではないか。このように解釈すれば、従来問題視されてきた夕顔（女性）からの贈歌という不審は、もともと存在しなかったことになる。謎は読者の本文誤読が生み出した幻想だったのである。

〔注〕

（1）吉海直人「夕顔巻の相互垣間見」『「垣間見」る源氏物語』（笠間書院）平成20年7月。

（2）「さしのぞく」については、中澤宏隆氏『「夕顔巻」冒頭部に関する一考察——夕顔はなぜ源氏に歌を詠みかけたのか——』國學院雜誌107—9・平成18年9月で検討され、「顔を出す」と解釈されている。高橋敬子氏「源氏物語夕

顔巻「心あてに」の和歌世界——「さしのぞく」・「のぞく」の見地から——」語学と文学45・平成21年3月も同様に、「顔を出して見せる」意としておられる。

（3）たとえば伊井春樹氏は「さすがに源氏に仕える隨身だけあって、武器を帯びた舍人としての職責に加えて和歌のたしなみも充分にそなえていた」と評価しておられる（『源氏物語の引歌表現』『源氏物語の探究五』風間書房・55年5月）。引歌の重要性に拘泥するあまり、別の仕掛けが見落とされることもある。そのことは吉海直人「明石の君のしたたかさ」『源氏物語の新考察』（おうふう・平成15年10月）で指摘しておいたが、ここもその好例ではないだろうか。

（4）源氏物語以後の用例としては、『栄花物語』六例、『狭衣物語』一七例（内「ひとりごと」三例）、『夜の寝覚』六例、『堤中納言物語』一例、『とりかへばや物語』五例などとなっている。

（5）『うつほ物語』楼の上下巻の「独り言」に、「宮もろともにえ見せたてまつらぬよ」とのたまふを、大将聞きたまひて」（新編全集514頁）は、犬宮の「独り言」を大将（父仲忠）

が聞いている。仲忠に向かって言ったのではないにしても、他人に聞かれないようにという配慮などは認められそうもない。

(6) 『蜻蛉日記』のもう一例は、下巻天延元年冬条に「まがまがしう、さ言ふ者の袖ぞ濡らすめるとひとりごちて、また思ふやう」(新編全集320頁)とあり、これは一般的な独り言でもよさそうである。

(7) 『枕草子』のもう一例は、二九三段に「明けはべりぬなり」とひとりごつを、大納言殿、「いまさらにな大殿籠りおはしましそ」とて」(新編全集446頁)とあり、一般的な独り言でもよさそうだが、頭注に「はべる」があるので、独り言といっても相手の貴人を意識した表現」という示唆的なコメントが付いている。しかもそれに大納言(伊周)も敬語表現で答えているので、これは帝を意識しての発言ではないだろうか。

(8) 倉田実氏「心にもあらず独りごち給ふを―発信する独り言」国文学45―9・平成12年7月、上村希氏「ひとりごつ」薫」國學院大學大学院文学研究科論集28・平成13年3月、田辺玲子氏「源氏物語における「独り言」の引歌―

「ひとりごつ」と「うち誦ず」と「口ずさむ」」瞿麦13・平成13年7月。

(9) 「ひとりごつ」が引歌になっていることは、田辺氏注(8)論文で指摘されている。なお横笛巻には「独りごちうたふ」(358頁)という例もある。

(10) 倉田氏注(8)論文、吉海直人『源氏物語』東屋巻の薫と浮舟―逢瀬と道行き―」國學院雜誌11―12・平成22年12月参照。

(11) 薫の「ひとりごつ」については上村氏注(8)論文、鈴木裕子氏「薫論のために―独詠という快楽、あるいは「大君幻想」という呪縛―」源氏研究6・平成13年4月参照。なお上村氏は「ひとりごつ」を大きく同席者の有無に二分され、同席者がいた場合はさらにa聞かせる意図があった・b聞かれてしまった・cその他に三分類された上で、「同席者のある場合が多く、相手に向かって「ひとりごち」ている例も少なくない」と述べておられる。夕顔巻も同様に考えられるのではないだろうか。

(12) 隨身は引歌の元歌までは知っていたであろうが、「をかた人」の真意は理解できなかったようである。ただしこ



のやりとりが功を奏したのか、後に「かの夕顔のしるべせし隨身ばかり」（夕顔巻152頁）と、お供の一員に選ばれている。「隨身を召させたまひて、御車引き入れさせたまふ」（同158頁）や「例の隨身ばかりぞありける」（同165頁）も同一人物であろう。

（13）中澤氏注（2）論文参照。

（14）清水婦久子氏『光源氏と夕顔——身分違いの恋——』（新典社新書）平成20年4月参照。古くは手嶋真理子氏「心あてに」歌の解釈について「筒城宮2・平成9年3月で指摘されている。なお竹内正彦氏「そのその夕顔——「夕顔」巻における「心あてに」歌の解釈をめぐって——」玉藻45・平成22年3月は、膨大な研究史を踏まえた上で、さらなる新見を提示しておられる。

〈付記〉本稿脱稿後に、廣田収氏『源氏物語』『独詠歌』考』人文学188・平成23年11月が刊行された。その中で「ひとりごつ」についても言及されており、本稿と重なる部分もある。合わせて参照していただきたい。

